1920年代から1930年代の女性デザイナーたち

展示作品は、戦間期の1920年代から1930年代にパリで活躍した3人のクチュリエールたち（女性デザイナーたち)のもので、共立女子大学コレクションにある程度まとまった点数が所蔵されている。3人のクチュリエールとは、Elsa Sciaparelli(1876-1975)、 Maria Monaci Gallenga(1880-1944)、 Gabrielle Chanel(1883-1971)である。

1918年に第一次世界大戦が終結し、ヨーロッパを覆っていた暗雲が吹き払われると、他の芸術活動に呼応するように、服飾デザイナーたちの作品は変化を見せ始める。女性は更に身体の自由を謳歌しはじめた。「イヴがイチジクの葉を着けてエデンの園から彷徨い出て以来、女性の服がこれほど軽微になったことはなかった」と言われたほど、スカート丈は短く、襟刳りは深く、材質は薄く軽くなった。

大戦前のファッション界のパイオニア的存在だったポール・ポワレとマリアノ・フォルチュニイは、女性の身体をコルセットの締め付けから解放したが、1920年代に入ると主流から外れ、代わってマドレーヌ・ヴィオネとガブリエル・シャネルの２人の女性デザイナーの活躍が顕著になる。2人とも自由な身体の動きを追及したが、衣服の表現方法は全く違っていた。バイアス・カットの創始者と言われるヴィオネは、流れるようなドレープやフレアーで女らしい優雅さを表出させ、他方、帽子作りをスタートにジャージーやツィードなどを材料としてスポーツウェアから服作りに入ったシャネルは、合理性と実用性の極ともいえる、シンプルと優雅さとを共存させた作品を次々と創作した。

残念なことに共立女子大学コレクションにはヴィオネの作品は１点もないが、この展示では1920年代のシャネルのアンサンブルとレースのワンピースを選んでみた。

1930年代のパリで、最初は大胆なニットウェアで評判になったイタリア生まれのエルザ・スキャパレリとシャネルとの対立は、ファッションの世界では有名であったようだが、この対立のお陰でスキャパレリはシャネルのシンプル＆エレガントに挑戦するかのように、いかにもイタリア的で独特の豪奢な色彩と装飾に個性を発揮した。スキャパレリの名を高めた色彩にショッキング・ピンクがあるが、展示作品のバーガンディ色のベルベットに金モールをつけたオペラケープもまるで舞台衣装のような華やかさである。

また、展示したスキャパレリの２つの帽子は、シャネルの帽子が飾りもなく風除けが主という実用一点張りであるのに比し対極に位置している。

もう一人のイタリア人デザイナーのマリア・ガレンガは、シャネルやスキャパレリほど名を知られていないが、1925年のエキスポでは彼女のパヴィリオンはフランス人に大いに人気を博し、フェミナ誌主催のファッション展にはイタリア人で唯一参加を要請されたという。また1928年に彼女がパリに開いたイタリアン・ブティックもそのモダンなイタリアン・テイストのショーウィンドウが大人気だったと聞く。黒いベルベットにステンシルで金銀彩を施す手法はフォルチュニイを思わせるが、色を重ねて、影のようなボカシ効果を出すテクニックはガレンガ独特のもののようである。

ガレンガ
金銀彩イヴニング
1920年頃

ガレンガ
ベルベット・クローク
1920年頃

シャネル
コートとドレスのアンサンブル
1926年頃

ガレンガ
オペラコート
1920年頃

スキャパレリ
樹皮丈ドレス
1930年頃